

日本保健科教育学会 第6回研究大会
2021年12月5(日)-11日(土)

抄録集

■大会テーマ

「感染症についての保健の授業を考える
— 新型コロナウイルス感染症をめぐって —」

ご挨拶

世界保健機関（WHO）が、2019年に発生した武漢由来の新たな感染症を、「COVID-19」（新型コロナウイルス感染症）と命名したのは、2020年2月の事でした。その後、周知の如く世界の多くの国々で感染が拡大し、正にパンデミックとなりました。

昨年の本研究大会もその影響により、Web上での開催を余儀なくされましたが、今年も、いわゆる第6波襲来の懸念が払拭出来ず、止むなく昨年同様の開催形式を取る事に致しました。皆様方と直接、相見える事が叶わず大変に残念ですが、ご理解とご協力をお願い申し上げます。

今大会のテーマは表題の通りです。約2年間に亘って、私たちを悩ませ苦しめ続けている「新型コロナウイルス感染症」に関して、ある程度分かってきた事もある一方、依然として不明確な部分も残されています。そうした状況下において、保健授業でどのような接近が可能なのかを模索する事は、大いに意味があると考えます。また、そもそも「感染症」についての保健の授業がどの様に行われ、どのような機能・役割を果たすべきなのか、といった事にも再度、考えを巡らせるべきだとも思うのです。

今回も、一般発表、特別講演、及びシンポジウムのそれぞれを用意致しました。そうしたプログラムの中から、より多くの有益な知見・示唆を獲得して下さる事を、祈念申し上げます。

日本保健科教育学会第6回研究大会
大会長兼学会長
今村 修（東海大学名誉教授）

テーマ「感染症の授業を考える」

シンポジウムの趣旨

第6回研究大会では、「感染症についての保健授業を考える-新型コロナウイルス感染症をめぐって-」という大会テーマのもと、新型コロナウイルス感染症の授業実践を俎上にのせて議論します。昨年の大会ではこれまでの保健科教育における感染症の授業を振り返り、その成果と課題について考察しました。今回は一步踏み込んで議論したいと考えています。ここまでやや慎重なアプローチをしてきたのは、コロナ禍にあって教育目的・内容をとらえるには時間が短すぎると判断したからです。しかしこの状況も2年に及びまだ科学的にも不明なことはありますが以前より幅広く（社会問題としても）、深く全体像が見えてきたことも確かです。また、何よりもこの災禍に振り回された子ども達に向き合うことも必要ではないかと考えたからです。

小倉先生には「おしゃべり病理医の MEdit Labo」で作成された新型コロナ感染症の教材と楽しい授業を紹介していただきます。斎藤先生には8時間に及ぶ授業実践を通じて「新型コロナウイルス感染症・パンデミック」の学習内容を中心に報告していただきます。近藤先生からは「病者と共に生きる」をテーマに「感染症差別問題」を克服した HIV/AIDS 授業研究の成果からみた「新型コロナ感染症」について報告していただきます。

このシンポジウムを通じて教育課程にある「感染症」をどう塗り替えていくのか、今後の議論の魁けとして位置づけていきたいと考えています。

○司会：杉崎 弘周（新潟医療福祉大学）

○調査報告者：岡崎 勝博（東海大学）
「大学生の新型コロナウイルス感染症についての認識調査」より

○シンポジスト：小倉 加奈子（順天堂大学医学部附属練馬病院）
「おしゃべり病理医の MEdit Lab」から楽しい教材・授業の紹介

○シンポジスト：齋藤 治俊（前・岐阜聖徳学園大学）
求められていた新型コロナウイルス感染症の授業・・・「何を、どう教えたのか」

○シンポジスト：近藤 真庸（前・岐阜大学）
「病者と共に生きる」感染症の授業をどう創り出すのか

■一般発表（口頭発表）

研究発表① 座長：小浜 明（仙台大学）

研-1

中学生のストレス対処の経験

○杉崎 弘周（新潟医療福祉大学）、物部 博文（横浜国立大学）、片岡 千恵（筑波大学）

本研究の目的は、中学生のストレス対処の経験を明らかにすることであった。2018年10月にA県B市C区のすべての中学校の生徒（8校1887名）を対象とし、各学校長の協力を得て、依頼状、調査用紙、返信用封筒を学校（学級）で生徒に配布してもらった。これらを自宅に持ち帰り、保護者の承諾を得た後に回答して学校提出ではなく生徒個々に返信（投函）してもらった。保健の教科書や一般的なストレス対処法から48項目を設定し、「あなたがストレスを感じた時にしたことがあるものをいくつかでもいいので選んで、カッコの中にマルをつけてください。」と依頼し、性別と学年もたずねた。230名の参加（回収率12.2%）があり、これらのデータを分析に用いた。全体の結果として、「音楽を聴く」「寝る」「動画をみる」「ゲームをする」を選択した割合が高かった。割合が高いものは保健の教科書に記載されているストレスへの対処法と一致するものがほとんどであった。一方で、教科書に記載されていないものも選択されていた。男女別では、女子は友達とすること、男子は個人ですること割合が高かった。また、学年別でみると、3年生は選択数が多くなっていた。男女や学年による差異を踏まえ、適切な指導法を検討する必要があるだろう。

研-2

中学生における精神疾患に関する教育内容の検討

○森 良一（東海大学・東邦大学大学院）、水野 雅文（東京都立松沢病院・東邦大学大学院）、小塩 靖崇（国立精神・神経医療研究センター）、小口 芳世（聖マリアンナ医科大学）、根本 隆洋（東邦大学大学院）

【目的・方法】

2022年から実施される高等学校学習指導要領に精神疾患に関する内容が位置付けられたが、本研究では精神疾患の好発年齢が始まる中学校に位置付けることを検討する。そこで、高等学校の内容を参考に、中学校学習指導要領に「心の健康」の内容が位置づいている中学校1年生を対象として、精神疾患に関する授業（50分の授業3回）を実施し、授業実施の前後、実施後3か月後時点で、精神疾患に関する一般的な知識（MIDUS）と個別の疾患の知識（高等学校学習指導要領解説 保健体育・体育編に例示されているうつ病、統合失調症、不安症、摂食障害の症状認識スコア）について質問紙により評価した。

【結果・考察】

精神疾患に関する一般的な知識（MIDUS）スコアは、実施前と比べ、実施後に有意に向上し、その効果は実施3か月後まで持続していた。個別の疾患の知識（うつ病や統合失調症などの症状認識スコア）は、実施前と比べ、実施後では有意に向上していたが、その効果は、実施3か月後時点まで持続しなかった。また、一般的な知識（MIDUS）と個別の疾患の知識（うつ病や統合失調症などの症状認識スコア）との関連性は認められなかった。

中学校における精神疾患の内容を導入するには、一般的な知識を中心とし、個別の疾患の位置づけについては、授業の時間数、教育方法・教材の工夫、対象疾患等を慎重に検討する必要があることが示唆された。

研-3

教科専門科目「衛生学及び公衆衛生学」講義の内容と方法に関する実践的研究(6)

○柘植 (富野) 順子 (岐阜協立大学・非)、近藤 真庸 (岐阜大学名誉教授)

本研究の目的は「教科の授業」との関連を踏まえ、教科専門科目「衛生学及び公衆衛生学」の内容と方法を明らかにすることである。本報告では「歴史的追体験の方法」の学習過程における予想問題と復習問題の位置づけと方法的意義について考察した。「歴史的追体験」とは過去に起きた健康被害の歴史を当事者の立場から捉えさせる手法である。学習過程は5段階である。①原因究明史にみられた誤謬に着目して作成した予想問題を前時終末に提示、「仮説」を立てさせる。②各自が立てた「仮説」を本時当日までに送信させる。③受講生全員の「仮説」一覧を配布、それらに照らして新聞記事や疫学的調査研究資料等の読み取り(「実験」)を通して「仮説」を「検証」させる(本時)。④「実験」を通して「検証」した「仮説」を吟味・修正させ、「仮説→実験→検証」過程を再構成させるための課題(復習問題)を提示する(本時終末)。⑤次時冒頭で復習問題レポート一覧を配布、学習のまとめとする。教材「食中毒事件としての水俣病」の特徴は、「歴史的追体験の方法」を用いて作成した教材を「仮説→実験→検証」という科学的認識形成の方法によって学習を組織し、レポートを媒介にした意見交流という「対話的手法」を重視している点にあり、「教科の授業」において「過去の公害から学ぶ環境問題」(大修館書店『現代高等保健体育』改訂版)の教材として活用可能であり、他題材の授業づくりにも援用可能である。

研-4

新型コロナウイルス感染症対策を格差の視点で考える教材作りの必要性について

○小川 かをり (早稲田大学教育学部非常勤講師)

新型コロナウイルス感染症は国によって感染拡大の様相も程度も異なるが、保健行政の対策による違いはデータとしてのエビデンスはない。今まで様々な仮説が立てられ検証がなされてきたが、はっきりした相関のある要素は見つからなかったという。しかし、もっと根本的な社会のあり方、例えば高度医療の発達の度合いとか、GDPの差とか、高齢化社会かどうかとか、そういった基礎的なあり方との関連は見つかりつつあるという。

ユーヤン・グー氏(注1)は、41種類の変数と米国の各州の新型コロナ死者数との間の相関関係を探り、新型コロナによる死亡と重要な相関関係がある変数を3つ発見したという。それが「所得格差」、「人口密度」、「人口当たりの介護施設入所者数」だ。そのうち最も影響が大きかった要素は「所得格差」だったと断定した。

そこでどのような社会が感染症に対して強い社会なのか? という視点でこれらのデータを教材化してみたいと考えた。算出された3つの要素に加えて、手洗いの水がない国、密度高く住む住環境の地域というルポ(注2)も付け加え、世界の健康格差にも目を向けさせる教材にしたい。

感染症対策は個人でできる範囲だけではなく、社会として感染症に強い社会を作るという視点を持たないと成し遂げられない。このことを学ばせる教材作りを目指したい。

文献

(注1) ユーヤン・グー「ヘルスマップの有用性と未来世界での応用」MIT テクノロジーレビュー[日本版] Vol.4/Summer 2021

(注2) スワミナサン・ナタラジャン、BBC ワールドサービス「手洗いが難しい国、どうすれば? 新型ウイルス対策の壁」2020.3.19、bbc news japan <https://www.bbc.com/japanese/51956990>

研-5

知識構成型ジグソー法を取り入れた高校保健授業の分析：問いに対する学習前後の記述に着目して

○須田 有乙（聖心女子大学大学院）、植田 誠治（聖心女子大学）

【目的】授業で提示する問いの違いが学習前後の記述に作用するのかを明らかにすることを目的とした。【方法】高校2年生4クラスを対象とし、それぞれのクラスに、中高年とその健康、医薬品とその活用、医療サービスとその活用、の授業を実施した。対象の4クラスを①問いの主語が「あなた」の群、②対照群、の2群に分類した。分析は、学習前後の問いに対する解答をテキスト形式にデータ化し、KHcoderを用いてテキストマイニング分析を行なった。分析内容は、頻出語抽出、対応分析、共起ネットワークの作成、非計量多次元尺度構成法による分析、とした。【結果】ここでは、中高年とその健康についての結果を示し、他2つについては発表にて示すこととする。①群の学習後の頻出語（上位5つ）は、健康、運動、人間ドック、自分、行く、であった。②群の学習後の頻出語は、運動、健康、生活、趣味、ストレス、であった。また、共起ネットワークでは、上位5つの頻出語を中心に他の頻出語との強い繋がりが示された。さらに多次元尺度構成法を用いた分析では、単語の関係性が示され、7グループに分類されたことによって、中高年とその健康についての考えを視覚的に捉えることができた。【考察】①問いの主語が「あなた」の群では、中高年期をいきいきと生活するための明確な目標や計画についての記述が見られた。このことから、①群は問いを自分の生活と結びつけて考えることができたと推察する。

研-6

保健の授業における情意領域の校種差に関する研究 - 概念間の関連に視点をあてて -

○田中 滉至（九州共立大学）、山田 浩平（愛知教育大学）

【背景・目的】これまで保健の授業は、どの校種の児童生徒からも「保健の学習は価値がある」（認知的側面）と評価されてきたが、保健の学習を「好き」「楽しい」（情緒的側面）と回答される割合は相対的に低いと評価されてきた。しかし、両概念がどのような相関関係にあるかはほとんど検証されてこなかったため、実践上の示唆を得難い状況にある。そのため、本研究では、授業に対する楽しさ（情緒的側面）と、内容に対する認識（認知的側面および行動的側面）の相関関係を校種ごとに明らかにする。【方法】2015年に、小学生187人、中学生402人、高校生302人を対象として無記名自記式の質問紙調査を実施した。本研究では、保健の授業の情意領域（情緒的側面、認知的側面、行動的側面）に関する質問16項目を分析対象としている。分析にあたっては、校種別に探索的因子分析をし、因子間の相関係数を算出した。【結果・考察】中高生においては、情緒的側面と他の側面の相関係数が中程度から高程度あるのにもかかわらず（ $r = 0.400 \sim 0.576$ ）、小学生においては中程度であった（ $r = 0.344 \sim 0.388$ ）。すなわち、中高生は3つの側面が比較的近い関係にある一方で、小学生は情緒的側面が比較的独立した側面であると解釈できる。そのため、相対的に考えるならば、中高生の認知的側面および行動的側面の改善（授業の価値を実感してもらうなど）には情緒的側面への工夫（楽しいと思えるような授業をするなど）が重要になる。

研-7

CROSS OPINION カードを用いた対話的な性教育—中学生を対象とした授業実践—

○野島 涼花 (茨城大学)、島田 夏純 (茨城大学附属中学校)、石井 里香 (高崎経済大学附属高等学校)、
今泉 友里 (茨城大学)、上地 勝 (茨城大学)

知識伝達型になりがちな性に関する授業において、知識のみではなく思考力や判断力を身につけ、それを態度や行動に結びつけられるような実践力の育成をねらいとして、性に関する内容に対してナーバスかつデリケートに感じている中学生を対象とした授業実践を行った。本研究の目的は、そのねらいに沿った実践となっているのかを検証することである。

対象はI大学附属中学校1年生4クラス144人とし、授業当日欠席した6人を除いた138人(96%)を分析対象とした。授業は、保健分野「生殖に関わる機能の成熟」の中の1時間として構成した。授業では、石井らが高校生を対象に実践した「CROSS OPINION」カードを用いた。授業はじめに性教育に関するイメージ、授業の終わりに感想等を尋ね、選択式および自由記述式で回答を求めた。さらに授業内の生徒の様子を録画、録音し、逐語録を作成した。

授業前は、今までの性に関する授業に対して、難しい、恥ずかしいというイメージを抱いている生徒が32人(23%)いた。授業後には、多くの生徒が、性に関しての授業イメージが変わったと回答した。変わらなかったと回答した生徒は45人(33%)いたが、それらの中にも「そんなに難しい事ではないという事を知った」「デリケートなものだと知った」「みんなと話すことで少し深まるので良かったと思う」と回答している生徒もあり、態度の変容がみられた。

研-8

教職科目「保健科教育法」講義の内容と方法に関する実践的研究(2)

○山内 康彦 (中部学院大学非常勤講師)、近藤 真庸 (岐阜大学名誉教授)

「45~50分間の授業を〈シナリオ〉形式(近藤、2000)で表現できる力」。これを仮に「授業デザイン力」と呼ぶことにする。本報告は、「授業デザイン力」を育てる実践の「第2報」である。

この実践は、6つの柱で構成する「保健科教育法」講義(4単位:30コマ)の「保健授業デザイン論(2年後期:第1講~第7講)」に該当する。保健授業をデザインする「6つのスタイル」論の後に、3つの典型授業を3段階(2コマ)で体験させる演習(第2講~7講)を位置づける。

1) 第1段階: 教具を用いたライブ授業参加(板書計画)

⇒ 近藤が開発した〈シナリオ〉を、山内がライブで授業をする。

2) 第2段階: 授業映像をテキストにした授業分析演習(授業分析のポイント提示)

⇒ 近藤が授業(映像)分析のポイントを提示した後、授業映像を視聴させ、子ども目線での授業分析レポートを作成させる。

⇒ 教師目線で、山内が授業分析する。併せて、学生のレポートに対してコメントする。

3) 第3段階: 〈シナリオ〉をテキストにした授業実習(教授行為、声、身振りなどの表現力)

⇒ 〈シナリオ〉をテキストに、様式と構成要素をおさえる。山内が実習指導をする。

実践を成立させる条件としては、①演習教材としての授業映像 ②実習教材のテキストとしての〈シナリオ〉の2点に加え、③現場経験のある教員との共同講義スタイルの実現が挙げられる。

ポ-1

1960年代における問題解決的健康学習に関する一考察-『学校体育』（日本体育社）の通覧分析を通じて-
○近藤 雄大（北海道大学大学院）

本研究は、『学校体育』（1960～1969年）の分析を通して、1960年代の保健科教育の課題を明らかにすることを目的とした。

まず、学習指導要領（1958～1970年）を再検討するために保健科教育の記述内容をテキストデータ化し、KH coderで分析した。次に、『学校体育』の学校保健に関する論稿を悉皆収集した。そのタイトルをテキストデータ化し、KH coderでクラスライズした結果、①保健科教育、②保健指導・保健学習、③安全教育、④公衆衛生・精神衛生、⑤医学・生理学、⑥事故・傷害の防止の6つのグループとなった。その後、①保健科教育に関する論稿を同じ手順で分析した。分析結果から作成した抽出語リストと共起ネットワークより、「知識の理解により児童生徒の健康な生活の基盤を養うことができても、健康な生活習慣を形成することはできないこと」や「教科書のみを教材として利用する問題点や実習や実験の少なさ」を指摘する文章が確認された。

以上の分析から、1960年代の保健科教育は、保健科教育に対する制度と現場の考えの乖離があったと判断される。また、その乖離が保健科教育の質の向上・改善に繋がらなかった要因の一つであると考えられる。1960年代の保健科教育の課題は、(1)問題解決的健康学習を中心にして保健の授業を展開することで、問題解決的学習を主として展開される理科や家庭科との差異化が図れなくなること、(2)知識の教授に拘泥しなければ、保健の授業として成立させることが困難であったことであると考えられる。

ポ-2

「見方・考え方」を鍛えることを企図した保健学習の授業づくり
- 「健康や安全に関する原則や概念」に着目することの意味-
○野津 一浩（静岡大学）、齋藤 剛（静岡福祉大学）

今次の学習指導要領改訂では、教科の学習の足場をコンテンツ（内容）ベースからコンピテンシー（資質・能力）ベースへ転換させていくことが大きな柱として明示された。このことは、保健科に限らず全ての教科に対して、なぜ教科として学ぶのかを問い直すことを求めていると考えられる。そして、これまで学習の目的としてきた内容を、資質・能力を育成するために活用するイグザンプルであるという発想をすることが必要とされる。このような改革を推し進めていく視点の中心は、深い学びの鍵として提示された「見方・考え方」である。そのため、「見方・考え方」の視点から保健科の教科内容を見つめ直し、「保健科で取り扱う健康や安全に関する内容を活用して『見方・考え方』を鍛えていく」とはどのようなことなのかを追究していくことが必要と考えられる。

本実践報告では、まず「見方・考え方」を鍛えることの内実を「知識の構造化」の視点から解釈し整理した考え方を提示する。続いて、その理解に基づく保健科の授業づくりの改革について、今年度より小中一貫教育をスタートさせた静岡大学教育学部附属浜松小中学校が取り組み始めた実践の内容を紹介する。具体的には、これまでの「どのようにすればよいか」を考えさせることを主体としてきた保健指導的な授業から、「どのようなことなのか」を追究する保健学習の授業へ転換を図ることを意図した授業づくりについて報告する。